
黒き狐は闇を舞う ~ Gods exist in world ~

糸桜花月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き狐は闇を舞う ｝ Gods exist in world ｝

【Nコード】

N2560W

【作者名】

糸桜花月

【あらすじ】

人々がいくら忘れても神は存在し、きまぐれに力を貸し、その反応を楽しむ。神が物に力を貸した“依代”、神が人に力を貸した“宿り身”などがその証。人々は強大な神の力を求め、今も昔も争いあう。その神の力が散らばっている社会を、一般の何も知らない人々がいる社会と区別して、“裏の世”と呼ぶ。

ジェーンと菊次はその裏の世で何でも屋を営んでいる。盗み、討伐、諜報、運び屋などなど、だが、今まで殺しを請け負ったことはない。裏の世にいくつか存在するどの勢力の配下にもならず、ただ

気ままに仕事を請け負う彼らは問題児扱いされるが、彼らは彼らの思うままに行動する。そんな彼らに興味を持つ一人の男、それによりジェーンと菊次は裏の世の深い闇に徐々に関わっていく。

「私は、私の思うままに行動する」「理由なんて決まっている。面白そうだから、ただそれだけ」「この世は醜い。――そう
だろ、ジェーン」

何でも屋“孤妖”。盗み、討伐、諜報など、あなたの願いかなえます。

プロローグ（前書き）

はじめまして
初投稿です。

駄文で、しかもかなり亀更新になると思いますが、よろしくお願いします。

ブローグ

世の中が科学で満ち、奇跡が通用しなくなったとしても、不可思議なことは起こる。

それらは科学では証明できず、一般にとっては伝説や超常現象とされている。

世がいくら科学により神を否定しても、神はいる。

この世に起こる不可思議なことは神の力によるもの。

だが、実際にそれを起こすのは人間である。

神は、万能であるが故に傍観者である。

神の力は、すべて神が気まぐれに与えたもの。

それを使い、世に混乱を、世に救いを、世に破滅をもたらすのはすべて人の意思によるもの。

神は傍観者だ。故に、道を切り開くのはいつだって人間なのである。

人は神と違い、弱い。だからこそ、絶対的な力を求める。

力を求め、人々は集い、奪い合い、争いあう。

力で人は、人を騙し、世を壊し、人を助け、世を救う。

いつだって、醜く争い、立ち止まり、歩き続ける。

神はそれを見ているだけ、そして思う。

人間はなんて愚かで、滑稽で、だからこそ、愉快なのだ。

これは、神の力を求め、争いあう者たちのはなし。

その先にあるのは、救いか、
破滅か。

黒き狐

「どうする、このままでは」

「わかつている。だが、」

暗闇で蠟燭の炎だけしかないなかで、数人の男が話している。顔は見えないが、切羽詰まっているような声である。

「あのデータが出回ればどうなるか」

「だから、私は、反対したんだ。それを」

「よさないかつ」

一人の男が一喝すると、それまで言い争っていた声がぴたりと止んだ。

「もはや一刻の猶予もならぬ。“コヨウ”に頼むとしよう」

すると、またしても騒ぎ出した。

「あのような者たちに頼むというのですか」

「いたしかたないだろう」

「しかし、」

「他に方法はない」

ようやく静まるが、一人が苦々しく呟いた。

「気に入らぬ、狐風情が」

道場のような場所で、部屋の中央で一人の女が座禅していた。明かりもつけずに座禅をしている。

目を閉じて、目の前には一振りの刀を置いていた。

スッ、と戸が開き、女に光が射しこんだ。

射しこまれた光で女の髪が金に反射し、彼女は薄く目を開いた。

「　　菊、」

開けられた戸には一人の男が寄りかかっていた。

「ジェーン、」

逆光で顔は見えないが、男は笑っているようだった。

「仕事だよ」

女、ジェーンは黙ってうなずき、刀を手に立ち上がった。

歩いた拍子に金髪がゆれた。

某国某所、深夜某時刻、大きな屋敷で数人が見張りをしていた。
退屈なもので、そのうち一人が欠伸をする。

「おい、気を抜くなよ」

「分かつてるって。でも、どうせ何も起きやしないさ」

「ちがいない」

無駄口をたたきながら、油断しきっている彼らの間を風が通り過ぎる。

「――ん？」

ふと、目を前に向けると、こちらに向かって歩いてくる人影が見えた。

この国では見ない服装、体形から女のように見える、そして顔には狐の面をつけていた。

「なんだ、あれは」

「あの面は狐か……、まさかつ」

見張りの彼らは思い出す、裏の世で流れる噂の事を。

『東洋の島国の衣装に身をつつみ、闇を駆ける者たち。漆黒の服を

彩るのは、輝く金と銀。それらをまとい、狐の面をつける彼らは、金狐と銀狐。彼らの名は

『

「名は、孤妖^{こよう}」

「当たり前」

「「?!」!」

ゴッ、ドカッ。

見張りを気絶させ、狐の面をつけた男は女のほうを見遣る。

女は黙ってうなずき、男は屋敷のドアを開け、二人して中に入っていた。

その数分後には、爆音が響き、屋敷の一角は火に覆われた。

「この度はご利用をありがとうございます」

場所はかわり、スーツを着た屈強そうな男たちと、狐の面をつけた二人、孤妖が対峙していた。

「ぬかりはないだろうな」

「ええ、メリクリウスから最重要データ、“賢者の石”を盗み出しできました。勿論、あちらにデータは残していません」

屈強な男が凄みをきかせて問うのに対し、孤妖の方は飄々と答える。

ちなみに、先ほどから話しているのは孤妖の男だけである。

「では、早速いたこう」

男が手を出すと、孤妖の男の方が懷からCDディスクを取り出し、手渡そうとする。

「……………おや」

「……………はあ」

周りの変化に孤妖の男は面白そうに言い、女はあきれたようにため息を吐く。

「お前たちは何かと目障りだからな。消せるときに消すに限る」

孤妖の二人は銃を持った男たちに囲まれ、じりじりと輪が狭まり、銃口が更に近づいていく。

ヒュッ、――――チン。

音に目を向けると、孤妖の女が刀を鞘に戻していた。

それを認識した瞬間、銃身の半分が床に滑り落ちる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まあ、こういうのはよくあることなんで気にしませんけど、気をつけてくださいね」

孤妖の男はCDディスクをくると回し、手渡しながら言う。

「降りかかる火の粉には容赦しないので」

狐の面で顔は見えないが、おそらく笑顔で男は言った。

同時刻、孤妖が忍び込んだ屋敷に一人の男がいた。

長身痩躯で黒人風の男、身にまとう服は黒一色。

「ふーん、あの孤妖ね」

男は歩きながら言う。

「いやいや、結構なものを見せてもらったよ」

男は愉快そうに笑う。

だが、その目は感情を映してはいない。

「でも、誰も殺さないのはいただけないなあ。ちゃんと後片付けはしないと」

男の声に答えるものはいない。

なぜなら、男以外誰もいないから。

「だから、俺がやってあげたよ」

男の足元は血の海であつた。

いくつもの血の水溜りが屋敷のあちこちに広がっている。

「おかげで依代よりしろもいくつか手に入った。だから、そのデータは譲つてあげよう」

男は屋敷の外に出る。

月は雲に半分ほど覆われていた。

「気に入ったよ、孤妖」

男の足元がぼこぼこことあわ立ち、不快な臭いが立ち込める。

「だから失望させないでね」

なにやら黒いものが地面から這い出し、男の体を覆っていく。

その中で男は二枚の写真を取り出した。

「何でも屋、“孤妖”。――ジエーン・琴平ことひらと三沢菊次みさわきくじ」

男は新しい玩具を見つけた、子供のように笑った。

けれど、やはり、その目は――

月は完全に雲に覆われた。

予感

「なあ、知ってるか？外国でこわい事件が起こったんだって」

「えー、何それ？」

「ある屋敷が一夜にしてなくなった話。屋敷の中は血まみれになっ
ていて、――それはお化けの仕業なんだって」

「うっそだあ」

「本当だつてば！」

「今時お化けなんていないって、ジェーンもそう思うよね」

その言葉にジェーンは、本を読んでいた顔をあげ、子どもたちに
笑いかけた。

長い金髪がゆれ、黒い瞳がやさしく子どもたちを見つめる。

「――さあ、どうだろうな」

「いるよ、絶対！」

「いないよお」

子どもたちがまた言い争いを始める。

それを見ながら、ひざに乗っている白い猫をなでた。

ゴーン、ゴーン、

「ほら、暗くなってきたし、夕方の鐘もなったからもう帰ったほう
がいい」

「えー、」

「子どもは帰る時間だ」

「ちえ、分かったよ」

「じゃあ、またね。また宿題教えてねー」

「ああ、わかったわかった」

手を振りながら寺の階段を降りていく子どもたちを見送り、ジェ
ーンは表情を硬くした。

膝に乗っている白い猫が心配げに見上げてくる。

「――屋敷が血まみれ、か」

「本当にお前じゃないんだな？」

「くだいな、違うつて言ってるだろ」

寺の鐘のそばで法衣服を着た短髪の男、菊次が携帯を片手に苛立ち気に言っていた。

「まあ、お前はともかく、姫があんなえぐいことをするとは思えないからな」

「そんなに酷いのか」

「ああ、四肢が引き裂かれ、あたり一面血の海だったそうさ。しかも、すべて発狂したような死に顔らしい」

「……………へえ」

菊次は興味なさげに呟き、先ほどまで突いていた梵鐘の柱に寄りかかった。

「あまりの惨状に“政府”も動いた。もしかしたらお前たち“孤妖こよう”に疑いがかかるかもしれない」

「そりゃ、いいや。俺まだ“政府”に行ったことないんだよね」

「強がっているのが丸分かりだ」

「……………だったら、なんとかしろよ。お前の専門だろ、

“伊吹いぶき”」

見透かされたのが気に入らなくて、若干叩きつけるように言う。

だが、電話の相手に通じるはずもなく、軽やかに返される。

「俺は情報屋だ。求められた情報をクライアントに売ることが仕事であつて、お前の不始末を片付ける便利屋じゃない」

言外に、そんなこともわからないのか、と言われているのに気づいて、舌打ちをした。

付き合いが長いと、碌に嫌味も言わせてもらえない。

「ああ、そうさ。不始末は片付けないが、サービスはしてやる」

電話を切ってしまうおつか、と思案している菊次に予想外の言葉が

届く。

なんの真似だと勘繰るが、次の瞬間にはその考えも吹っ飛んだ。

「その屋敷を調査しているのは“北斗”だ」

「っ……………!!」

「“北斗”のうちの誰が担当しているのかまでは分らないが、十中八九、アイツだろう」

無意識に携帯を持つ手に力がこもる。

「なあ、菊次、そろそろ帰ったほうがいいんじゃないか」

顔から表情が無くなったのが自分でも分かった。

なぜ、そんなことを言う。

「別にそのまま居座れとは言わないさ」

「……………うるさい」

「ただな、お前は一度アイツと話すべきだ」

どうして、そんなことを言う。

知っているくせに、アイツが……………。

「……………黙れ、伊吹」

「そうしないといけないだろう。アイツは」

「……………っ、うるさい、黙れっ、陸!!」

耐え切れなくなつて大声で怒鳴り、勢いのまま電話をきった。

柱に体重をかけて寄りかかり、荒くなつた息を整える。

ゆっくりと深呼吸をし、空を仰ぎながら目を閉じた。

思い出すのは、血の水溜りと、そこに佇む……………。

「にゃあ……………」

鳴き声に反応し下を見ると、一匹の白い猫が尻尾を揺らしていた。

「竹千代^{たけちよ}、どうしたんだ？」

「どうした、なのはお前の方だろ」

そこへ新たな声加わった。

白い猫、竹千代はその声を聞くや身を翻し、声の主へ駆け寄った。足元に擦り寄ってきた竹千代を抱え上げ、ジェーンは改めて菊次を見つめる。

「鐘を突き終わっても戻ってこないと思ったら、お前何やっているんだ？もう夕餉の時間過ぎてるぞ。手伝わないとは、居候の分際でいい度胸だな」

近づいてくるジェーンを見ながら、菊次はさっきまでのどろどろした感情が治まっていくのを感じた。息を吐き、いつものように笑う。

大丈夫、こんな感情、すぐに忘れる。

「ごめん、ちよっとぼうつとしてて」

「――――？」

いつものように笑う菊次に、違和感を感じた。

なにか、おかしい――――。

「お前、」

「？なに？」

「――――いや、何でもない。早く戻るぞ」

夕焼けが暖かに二人を照らした。

「調査結果を報告します。建物の損傷、死体の状況からみると、あの屋敷に忍び込み一部を爆破した時刻と屋敷の人々が惨殺された時刻に大きなずれがありました」

「どういうことだ？」

「屋敷に忍び込み、建物を爆破したのは孤妖だが、屋敷の者たちを惨殺したのは後から来た第三者――――」

「そういうことです」

「わかんねーぜ、また戻ってきてやったのかもしれないじゃんか」

「――二度手間をする必要性が感じられませんが」

パン、パンツ、

「まあ、みんな落ち着いて。孤妖が殺したんじゃない、それでいいじゃないか」

「そうもいかねーだろ。だいたいあんな奴らを野放しにしとくからこんな面倒なことになったんじゃないか」

「だからさ、孤妖のことは私に任せてくれないか」
「はあ？」

「元々そういうのは私の管轄だろ？」

「――まあ、いいけどよ」

「異議なし」

「お任せしますわ」

「決まりだな。じゃあ、近いうちに会いに行ってくるよ」

「裏の世を駆けまわる小狐たちにね」

来客（前書き）

感想受け付けてます。

来客

道場のなかでジェーンと菊次が向かい合う。

それぞれの手には木刀が握られ、構えている。

ただし、それぞれの構えは対照的であった。

ジェーンが両手でしっかりと構えているのに対し、菊次は片手でゆるやかに構え、ジェーンが無表情でいるのに対し、菊次は口元に笑みを浮かべていた。

だが、二人の身体からは闘気が発せられ、空気がびりびりと震えていた。

ジェーンが目を閉じ、ゆっくりと息を吐く。

目を開くと同時に音もなく走りこみ、瞬時に間合いをつめた。

上段から振り下ろされたそれを受け流し、菊次も木刀を横に振るう。

身体の軸をずらすことでそれをかわし、ジェーンも続けざまに攻撃を放つ。

袈裟斬り、右薙ぎ、刺突^{つき}、左切上、切落^{きりおとし}……高速で振るわれるそれらを菊次は笑みを浮かべたままかわした。

身体をずらし、木刀で受け流し、受け止める。

カン、カン、カン、

木刀が打ち合わされる音が道場に響いた。

カンッ、

一際大きな音が響き、二人は同時に距離をとった。ジェーンは右手で構えていた木刀を左手に持ち直し、右手を添える。

居合、抜刀術の構えのまま走り込むが、菊次は構えもせず、笑みを深くした。

ゴウッ、

凄まじい勢いで薙ぎ払われた木刀は菊次の身体を捕らえなかった。即座に振り上げた木刀は、空中から振り下ろされた菊次の木刀とかちあい、新たな音を響かせる。

ジェーンは腕に力をこめ、菊次ごと木刀を弾き飛ばした。
「っ、と、とっ」

弾き飛ばされたことで崩した態勢を、床に手について立て直し、菊次はにやりと笑った。

それを見てジェーンは不愉快そうに眉をひそめ、構えていた木刀を下ろす。

深々とため息をつく。

「お前やる気あるのか？」

「ええ、ちょー真面目にやってるじゃん」

「どこがだっ？さっきからかわしてばかりで、半端な攻撃しかないじゃないか」

ジェーンは苛立たしげに髪をかきあげ、舌打ちをした。

それでも菊次は笑うばかりで、木刀をくるくると回している。

「……もういい、お前に真剣さを求めた私が間違っていた」

「それは言えてるな」

突如第三者の声が入り込み、二人は同時に振り返った。

そこにいたのは、ワイシャツにジーンズというラフな格好の男だった。

ボサボサな髪を無造作に一つにしばり、道場の戸に寄り掛かってタバコをふかしている。

「「陸人（さん）」」

「久しぶりだ、御兩人」

「で、菊次。姫とはどこまで進んでいるんだ？」

「はぁ！？」

突然突拍子もないことを言う陸人を、菊次はじとりと睨みつけた。

「何言ってるの？」

「なんだ、まだ手を出してないのか」

「・・・そんな関係じゃないし」

「同棲してるくせによく言う」

「同居だ！」

「たいして変わらんだろう」

「・・・何してるんです？」

お茶を持って戻ってきたジェーンが見たのは、陸人にぎゃんぎゃん噛み付いている菊次の姿で、数分席を外しただけでこうなるのに、毎度のことながら呆れた。

「おお、悪いな、姫」

「・・・いい加減、その呼び方やめてもらえませんか」

「あだ名だと思えばいいさ」

こちらの意見をさらりとかわす陸人に、ちいさくため息をつく。

「それで、何しにきたんだよ」

「随分だな、仕事を持ってきたというのに」

そう言っただけで陸人は封筒を取り出した。

封筒に書かれた宛先は“伊吹^{いぶき}”。

「中身は“孤妖”宛だ」

そういう陸人はいつもの気だるげな雰囲気は残しつつも、気配はがらりと変えていた。

ジェーンと菊次の知り合いである陸人から、裏の情報屋である伊吹に。

「依頼人からの伝言だ。依頼内容は直接あつて話したい。手数料をかけるがそのチケットで、指定の場所まで来てくれ、ってな」

中に入っていたのは、飛行機のチケットと地図。

「確かに伝えたぞ、じゃあな」

用事を済ませると、陸人はさっさと立ち上がり、道場から出て行く。

が、戸のところで立ち止まり振り向いた。
にやりと、意味ありげな笑みを浮かべる。

「まあ、せいぜい頑張れよ」

「なに考えてんだ、陸人のやつ」

それから数日後、ジェーンと菊次は陸人から渡されたチケットで指定の場所に来ていた。

「あの、意味ありげな顔、ぜったい、何か隠してる」

「お前はいつまでそうしているんだ」

指定の場所に来てまで悪態をついている菊次にジェーンは呆れた目を向けた。

今の二人は“孤妖”の格好をまとっている。

ジェーンは黒に金の刺繍の振袖、手には黒い太刀拵えの愛刀を持っている。

菊次は白い袴に黒の羽織を羽織り、和傘を担いでいる。

「いつまでもぐちぐちしてたって仕方ないだろ。行ってみれば分かるんだ、悩むだけ無駄だ」

「……ジェーンって本当に女？」

「どういう意味だ」

失礼なことを言う菊次を睨みつければ、菊次は無視して先に進んでいる。

「下手な男よりかっこいいってこと」

狐の面を手には笑う菊次に鼻であしらい、ジェーンも面をつけ、気を引き締めた。

ギイイ――

古びた屋敷の扉を開ければ軋んだ音が響いた。
明かりが少ない薄暗い廊下が暗闇に続いている。

「誰もいないな」

「進んで来いってことじゃないの。何の説明なしに呼び出しといて、出迎えなしとはね」

用心しながらも、迷いなく進んでいく。

念のため扉は開けておいた。

人の気配は、まったくない――

バタンツ、

大きな音を立てて扉が閉まり、蠟燭の明かりがゆらりと揺れる。

瞬時に背中を合わせて辺りを警戒した。

「はぁあー、やっぱり畏じゃん」

「そうとは限らんだろ」

「じゃあ、なに」

「――腕試し、とか」

もう一度ゆらりと、蠟燭の明かりが大きくゆれた。

「たいして変わらないと思うけどね」

二人に大きな影がかぶさり、音もなく人が降ってきた。

襲撃

音もなく降ったきた男は、振り上げていた大剣を重力の力もかりて思い切り打ちおろした。

だが、孤妖の二人は同時に前に飛び、剣は空を切る。

ド、ガアアン――、

空を切った大剣は床を砕き、粉塵を撒き散らす。

絶えず横に振られた剣はジェーンを狙うが、ジェーンは上に跳んでかわし、さらにその剣を踏み台にして上に跳んだ。

「はあああ」

だが、それを待ち構えていた新たな男が剣を振りかぶっていた。舌打ちして刀を抜いて、振り返る――

「ガッ――――」

それより先に高速で放たれた和傘の先が脇腹に当たり、男は苦悶の声をあげる。

絶えず刀の柄で殴ることで男を昏倒させ、和傘を蹴り落とした。和傘は迫ってきていた最初の男をかすめ、バランスを崩させる。そこに刀を切り落とすが、かろうじてふせがれてしまった。

キ、イイン――

空中での切りあいを眺める菊次に鉤爪をつけた新たな男が迫る。タンツ、と地を蹴り、宙返りの要領で高く跳ぶことでそれを避けた。

「よっ、と」

避けるだけでなく頭に蹴りをくらわせて昏倒させる。

続けて新たに襲ってきた男を、蹴り落とされて戻ってきた和傘で

なぎ倒した。

「――ああ、もう！何人いるわけ！？」

それでも沸いてくる襲撃者に菊次はやけくそ気味に叫んだ。

ピツ、ザザー

『ジェーン、拉致があかない。逃げるよ』

面に取り付けた通信機で気づかれないように会話をする。

『逃げる？そんな情けないことできるかっ！』

『我慢して、きりないから！！喧嘩しにきたんじゃないんだから、無駄なだけだよ』

『――――わかった』

長い間をあけつつも、納得してくれたらしいジェーンに安堵しつつ、菊次は懷から何かを取り出す。

『ジェーン、明かり消して』

その言葉にジェーンは斬り合いをしていた男を蹴り飛ばし、再び高く跳んだ。

空中で鞘におさめていた刀を抜き放つ。

高速で抜き放たれた刀は風を巻き起こし、壁高くに設置されていた蝋燭の火掻き消した。

続いて反対側も同じように刀を振るい、すべての明かりを消した。訪れる暗闇に襲撃した男たちは、警戒し、目を凝らして、標的を見逃さないようにする。

トン、コロロ、と何か丸いものが転がる音がした途端に、強めの閃光が目を襲った。

「ぐっ、――」

「っ、ああああー」

暗闇で目を凝らしていただけに突然の閃光は目に強烈な痛みをもたらした。

痛みに悶える中で、走り去る足音が聞こえる。

「逃がすな！追え」

光が治まると同時に追いかけようと走り出す。

が、ピシリツ、という小さな音が響いた。

ドツ、ガシャ、ゴロンツ……

「っ、うわあああー」

落ちてきた天井の瓦礫に行く先をふさがれ、押しつぶされ、男たちは悲鳴をあげた。

土煙が静まったときには、目の前に大きな瓦礫が行く手を阻み、孤妖の二人は消え去っていた。

タツ、トトト、ト、

「なんだったんだ、さっきのは？」

「さあーねー、恨まれる覚えはないようであるからねー」

廊下をひたすら走りながら、後ろを振り返るが、追ってくる気配はない。

「まあ、答えは依頼人さんに聞きましょうよ」

「！おっと、ここかな？」

走り続けると廊下は大きな扉に突き当たった。

二人は目配せをして、いつでも武器を抜けるようにし、静かに扉を開けて中に入った。

そこはホールのように、広々としており、天井にはシャンデリアがつるされていた。

真中にはこの場所に不似合いなソファとテーブルがある。

パチパチ、パチパチ、

ホールを見まわしていると、突如拍手が送られた。

人がいることには気づいていたので、ゆっくりと音のほうを見る。

「すごいね、君たちは」

ホールに面した二階の廊下、その手摺に女性がよりかかっていた。
「やっぱり彼らじゃ駄目だったか」

その女性はゆるやかに手摺から離れると、階段を降りてこちらに向かってきた。

ジェーンはさりげなく刀に手をかける。

「ああ、警戒しなくても大丈夫だよ。君たちと争うつもりはないから」

くすくすと笑いながら、最後の一段を降り、真正面から向き合う。
美しい女性だった。

腰まである鮮やかな金髪に、深い緑色の瞳、黒のキャミソールのドレスを着こなし、立っているだけでも気品を感じさせた。

だが、それよりも目がいったのは、彼女が首からさげている懐中時計であった。

鎖でぶらさげているそれは彼女が歩くたびに音を立てる。

なんとなく、似つかわしくないなとジェーンは思ったが、その時計に刻まれている文様をみてその考えも吹っ飛んだ。

時計の蓋に刻まれていたのは、二振り剣と杯。

「聖杯、・・・GRAIL?」

この裏の世に関わるものならば、誰でも知っている組織の文様。その言葉を聞いて、彼女は満足そうににやりと笑った。

「そう、君たちと話がしたいんだ。君たち、孤妖とね」

飽和した頭の中で、やはりこの人だとそんな笑い方でも華があるな、とずれたことを思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2560w/>

黒き狐は闇を舞う ~ Gods exist in world ~

2011年10月10日03時18分発行